

NCNL

2012.12

図書館だより

No. 32

CONTENTS

難病におけるライフコースの考え方	1	新潟県大学図書館協議会研修会報告	4
エッセイ 私の図書館活用法	2	平成25年購読中止・休止雑誌	
書評 最近の読書その他	3	図書館・リポジトリ利用統計	5
		医中誌webバージョンアップ情報、寄贈図書案内	6

難病におけるライフコースの考え方 ～個人と社会の関係から看護援助を導く～

地域看護学 教授 平澤 則子

私は、保健師として10数年働いた後に看護教育の道へ進みました。難病とともに生きる患者と家族の人生に寄り添う看護について、学び研究し、看護実践につなげたいと願ったからです。

保健所保健師として働いていた当時の経験を振り返ると、難病者の家族の中には、高校卒業後、進学を諦めて親の介護を引き受けたものの負担に耐えかねて家を出た娘さん、仕事をやめて10年以上親の介護を続けている未婚の子どもたち、病名告知を受けた後に互いを思いやり協議離婚を選択したご夫婦など、生活の変更や理想とは異なる生き方を余儀なくされる方々が多くおられました。医療依存度の高い難病者は家族のケアがなければ生活を営むことができないため、家族は「患者・家族」のように、一体のものとして扱われることが多かったように思います。家庭訪問先で初対面のお嫁さんから、「お義母さんの介護のために仕事をやめなければいけないのか」と問われたことがあります。“やめなくてもいいと思う”と答えると、お嫁さんは、“あなたで2人目です。そう言ってくれたのは・・・”と言われたのです。介護保険制度もない、そんな時代に私はライフコースという考え方を知りました。“ライフコースを学ぼう”、私の人生の転機となる出来事でした。

人が辿る人生の足跡は道筋、ライフコースと言われます。このような人生の道筋は、まぎれもなく私たちが自ら切り開いていった結果です。しかし、ライフコースは個人の人生にとどまる概念ではなく、社会現象として出現し、把握できる人生パターンを示す概念です。私は、このライフコースの視点から難病者と家族を理解することが具体的な看護援助を導くと考えました。まず、縦断的調査により神経難病患者を介護する妻の生活満足度が最も低く、生活満足度は患者の気管切開・認知症状出現などの病状変化と、退職・子結婚・親死別など介護者自身のライフイベントの影響を受けることを明らかにしました。次に、介護者のライフコースと対処及び生活満足度を分析し、自分らしく生きることを望む家族の対処方略モデルとその学習支援プログラムを試作しました。そ

の結果、介護者の対処方略の実施度は、家族の規範意識や情報収集力、地域のケア資源や情報量に関連することが明らかになりました。学習支援では、介護技術や介護情報の収集方法に比べ、介護と社会参加活動の両立・ネットワーク拡大といった方略は理解しても実施が難しいことが示唆されました。これらの研究結果は、介護者の生活満足度を高める支援において、個人に焦点を当てた介入の限界を示すものであり、社会的要因に働きかける必要性を痛感しました。

一方、家族であるがゆえに介護者であることを優先して生活しなくてはならないということは、患者にとってみれば家族の犠牲的なケアから開放されないために生きる自由が保障されないということです。私たちは、このような価値のずれを絶えず感じながら支援しています。近年、「人生は多様化した」と言われますが、そうした中で、現実はずし「自分らしい人生」を実感できるものではありません。個人のライフコースは社会的要因に大きく影響されているのです。そこで、私は現在、社会的要因としてソーシャル・キャピタルに着目し、その醸成方法についての研究を進めています。

長距離走の勝負が後半で決まるように、私たちの人生の幸せは、後半の生き方で決まるとも言われています。家族員が難病になったとき、長期にわたり患者と家族は多様な道筋を選択します。看護者は患者家族の価値を尊重し、選択を助け、その生き方を支持し、まわりの人々とともに人生の伴走者であり続けたいと思います。そして、私自身、いつかライフコース看護学というようなものをまとめてみたいと考えています。

(ひらさわ のりこ)



連載 エッセイ 私の図書館活用法

読書について

学部1年 渡邊 裕貴

私は読書として小説を読みます。小説といってもジャンルが多く、幅が広いですが、主に青春小説や推理小説、SF小説などを読むことが多いです。小説を読むようになったきっかけは、小学校4年生頃にクラスの子が分厚いハリーポッターの本を読んでいるのを見たときに、「かっこいいな」と感じて、私もハリーポッターを読み始めたことです。とても面白く、わくわくとさせられ、続きが気になって暇さえあれば読んでいました。小説を読む理由として、物語が面白いということが大前提として挙げられますが、他にも筆者によって異なる文章表現や、登場人物の考えや行動、物語の世界観など自分に新たな価値観が生まれることも面白いです。また、読み方を変えることで面白さが変わってきます。例えば、客観的に考えて読んでみたり、自分を登場人物に置き換えて、「自分だったらこのような場合、どうするか」などと考えながら読んでみたり、物語の展開の先を常に考えて読む方法があると思います。

私は現在、看護師への道を歩んでいます。この道を選んだ理由の中に読書の影響もあります。ある小説で、主人公がたったひとりの人物と出会ったことで、みるみると良い方向へ変わっていききました。この小説を読んで、私も多くの人と関わり、良い方向へ変わっていける仕事に就きたいと感じました。このように私にとって読書からの恩恵は大きく、またこれからも読書によって多様な考え方や価値観を広げていくことで患者さんへの理解も深めていけると思っています。看護師として、多様な考え方や価値観はもちろん重要ですが、それ以上に医学的知識が必要となってきます。本学の図書館には充実した医療文献があるため、これからは小説だけでなくそれらも活用して看護師へと歩んでいきたいです。



(わたなべ ゆうき)

図書館とのかかわり

学部2年 大島 綾笑

まず、「広い・きれい・本の種類が豊富」というのが、私の図書館への第一印象でした。私が初めて図書館に入ったのは、入学後の学内オリエンテーションの時です。本の分野ごとに分けられた本棚や本を広げて勉強するには十分すぎるくらい広いテーブル、一人で集中したいときにはもってこいの個別席など、これからの大学生活の中でたくさんお世話になるだろうとその時感じました。

大学生活が始まると、どんどん課される課題やレポート。その課題やレポートをする際に図書館はなくてはならない存在でした。1つの分野に対して何冊もの本があるので、学生みんなが借りに行っても困ることはほとんどありません。また、図書館内にコピー機もあるため、分厚い本などはその場で必要な部分だけをコピーすることもできます。そして本の貸出期間が2週間と長いところにも魅力を感じます。私は本を読むのが遅く、文章の読解が苦手なため時間がかかります。その読んだ内容を自分の言葉でレポートにまとめるのにさらに時間がかかります。そのため、2週間貸出できることはとてもありがたいことです。2週間では足りないとき、貸出の予約が入っていないければ、さらに延長もできます。大学の課題というのは1つだ

けではありません。何個も同時に出されることや、テスト勉強とかぶることもあります。あれもこれもと言っていると、レポートに手が回らないのが正直なところなんです。そんな時、貸出期間が長いというのは本当に助かります。

3年生になり実習が始まると、疾患のことや看護の手技、看護計画の立案、アセスメントなど調べるのがたくさんあるため、図書館の利用回数が多くなると思います。実習を良いものにするためにも図書館を有効活用したい、私は思っています。

今までは、図書館と勉強について述べてきましたが、本学の図書館は勉強するだけの場所ではなく、心を休める場所でもあると思います。医療看護の本だけではなく、雑誌や小説も置いてあります。外の景色はきれいです。勉強に疲れたとき、一人になりたいとき、図書館に寄ってゆっくりするのもよいかもしれません。本学の学生だけでなく地域の人も気軽に利用できる図書館、私たち学生の勉強をサポートしてくれる図書館が私の自慢です。これからも積極的に利用したいと思っています。皆さんにもぜひ、本学の図書館を利用してほしいです。

(おおしま あやえ)



連載 書評

最近の読書その他

肥田舜太郎[著]『広島が消えた日-被爆軍医の証言』影書房 2010

肥田舜太郎・鎌仲ひとみ[著]『内部被爆の脅威-原爆から劣化ウラン弾まで』筑摩書房 2005

広島テレビ放送[編]『いしぶみ 広島二中一年生全滅の記録』改訂新版 ポプラ社 2005

ヴィクトール・フランクル『夜と霧』1964

クロード・ランズマン[著]『SHOAH(ショアー)』作品社 1995

卯月妙子[著]『人間仮免中』イースト・プレス 2012

人間環境科学領域 講師 徐 淑子

先日、出身大学の同窓生組織が、存命する最後の被爆医師、肥田舜太郎氏の講演会を開催した。おもしろかったので、さっそく著書『広島が消えた日-被爆軍医の証言』（2010、影書房）を求めて読んだ。原爆投下直後の阿鼻叫喚、混乱の中、未知の事象（当時は、原爆のことも急性放射能症のことも知られていなかったのである）に直面しながら、現場で決断し行動する医師の思考過程がつまびらかにされているところが類書になく、興味をもって読んだ。ふしぎな脱毛、紫斑、目尻からの出血など、その時代の医学的常識からは考えられない症状に、救護所の医師たちは震撼する。だがその一方で、彼らは冷静に患者と患者の死に方を観察し、医師同士で議論しあって感染症、毒物、細菌兵器などありとあらゆる可能性を検討していたのである。ふしぎな下血が未知の感染症であった場合を見越しての、防疫体制までとられていた。自らの依って立つ地盤が根底から覆されるような状況で、なおこのような思考が保たれるものであろうか。肥田氏は、その後も被爆医療に長くかわり、やがて核廃絶運動の活動家として世界に知られるようになった。2005年には、『内部被爆の脅威』（ちくま新書）という新書も出している。原爆症例を多数知っている臨床家が、現代の原子力問題をどう見ているかに興味があるならば、こちらを併せて読むのもよいと思う。

広島・長崎の原爆投下と被爆体験については多数の書物があるが、わたしが手元にずっと置いているのは『いしぶみ-広島二中一年生全滅の記録』（広島テレビ放送編、1983、ポプラ社）である。わたしは短期間広島に住んでいたことがあるので、この本に出てくる地名にはどれもなじみがある。この本を読み返すと、「なにごとにもなかったように整えられている道路や街路樹、建物、公園。これはいったいなんなのだろう」と、不思議な感覚にとらわれたことなど思い出す。立ち直る人間の強さを示しているとも考えられたし、記憶が、時間の経過にしたがって摩滅していく程度とも感じられた。また、「足を運ぶ」という基本の行為はなにごとにおいても意味をもつものだ、と感じたことなども思い出すのである。

広島・長崎への原爆投下を前世紀の反人道主義的できごととして記憶するならば、ユダヤ人の最終解決問題へと連想が続くのは特別ではないと思う。実存分析で知られるV・E・フランクルの『夜と霧』は、極限状況に



おかれた人間の心理について知る最良の資料として、看護学の分野でもよく読まれている。「人間とは、ガス室を発明した存在だ。しかし同時に、ガス室に入っても毅然として祈りのことばを口にする存在でもあるのだ。」と記す同書は、強制収容所で人々がいかに生きたかについての書物である。逆に、クロード・ランズマン制作のドキュメンタリーをシナリオ書籍にした『SHOAH(ショアー)』（1995、作品社）は、人々がいかに死んでいったかの物語である。収容所の生還者、元ナチスの親衛隊員、収容所近辺の地域住民などさまざまな証言者の口をとおして、最終処理の様子が延々と語られる。読後のやりきれなさは半端ではない。ナチスの行ったことの中には、人体実験も含まれていた。そして、そのことへの人類的反省が、ニュルンベルク綱領(1947)、ジュネーブ宣言(1948.9)、世界人権宣言(1948.12)、看護師の倫理綱領(1953)、患者の権利宣言(1981)と具体的なかたちをとっていったのは周知のとおりである。看護師の倫理綱領は2000年のICN看護師の倫理綱領へと発展する。

暗い話題が続いたので最後は、漫画で。日本の漫画のクオリティは非常に高く、その表現力は世界に認められている。卯月妙子の『人間仮免中』は作者が精神障害者であるということだけでなく、漫画作品としても完成度が高い（つまり、娯楽性がじゅうぶんにある）。精神科医療に興味のある学生だけでなく、「自ら回復する力」について考えたい学生にはぜひ読んでほしい。

(そう すっちゃん)

平成24年度 新潟県大学図書館協議会研修会報告



本学が当番校となり平成24年度新潟県大学図書館協議会の研修会が10月16日午後1時30分から第1ホールで開催された。本学を含む県内の16大学より27名の出席者があった。

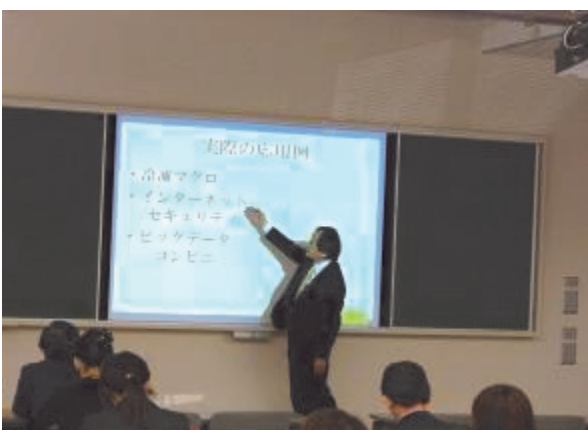
まず本学の橋本明浩教授より「大学図書館の新たな地平と洛陽は何か？」の講演があった。国立・公立・私立の大学図書館や一般図書館の現状と問題点を経年的なグラフで解説し、出版界の話題にも触れた。最後に人を図書館に引き付けるものや図書館の来館者の求めるものを述べた。

次に新潟県立図書館の有本教子課長代理より「公共図書館はどこまで変えられるかー新潟県立図書館の戦略」の講演があった。専門性を重視したために一時は23万人とピーク時より10万人も減少した入館者数を46万人と倍増させた様々な企画について詳細に述べた。

その後、吉原貴子主任司書の指導によって「ワールド・カフェ」という手法を使ったグループワークが行われた。3～4人のグループでテーマを「学生にとって魅力ある図書館サービス」として考えた

ことを話しながら模造紙に記入し、1人を残し他のグループに移って同様なことをし、最後にまた元のグループで討論し記入する（各15分）という内容であった。飲み物を飲みながら気楽な雰囲気の中、いろいろな所属や役職にあるものが、いろいろな意見を書き込み話し合いをすることで活発なグループワークとなった。

(図書館長 中野 正春)



橋本教授



有本課長代理



平成25年 購読中止・休刊雑誌

1. 購読中止雑誌

図書委員会で検討の結果、予算の都合上、下記の雑誌を平成25年から購読中止することになりました。ご了承ください。

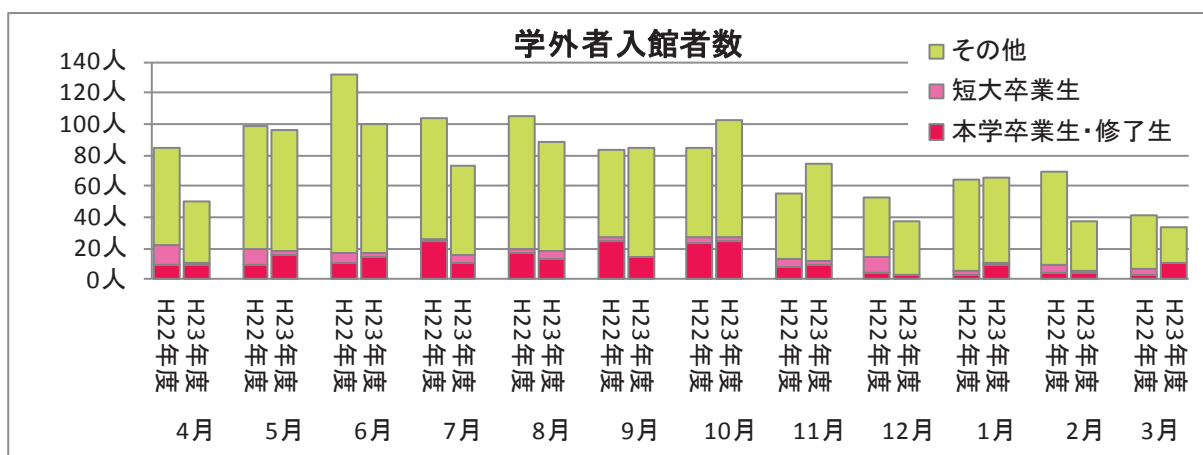
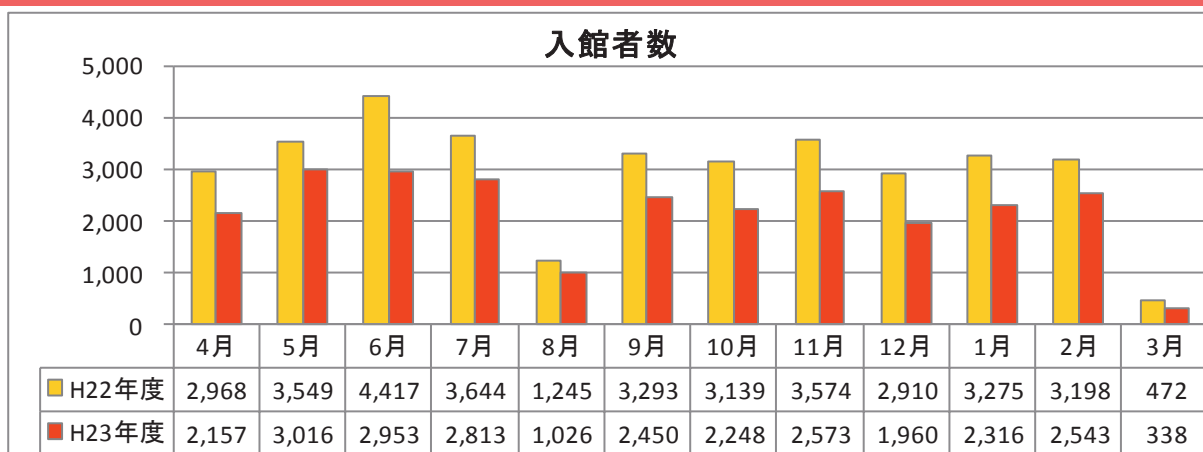
- ・ Health Education Journal
- ・ Heart and Lung
- ・ Qualitative Health Research

2. 休刊雑誌

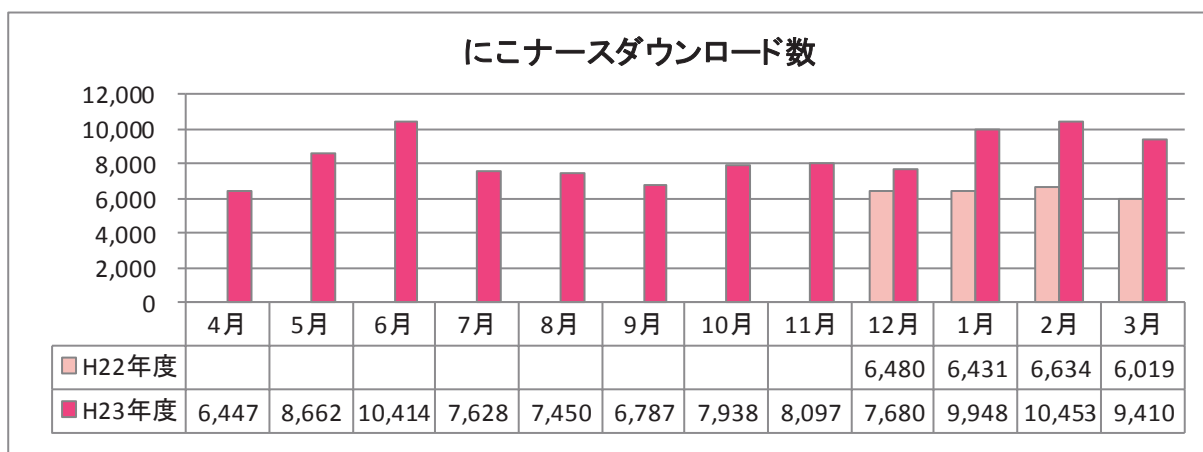
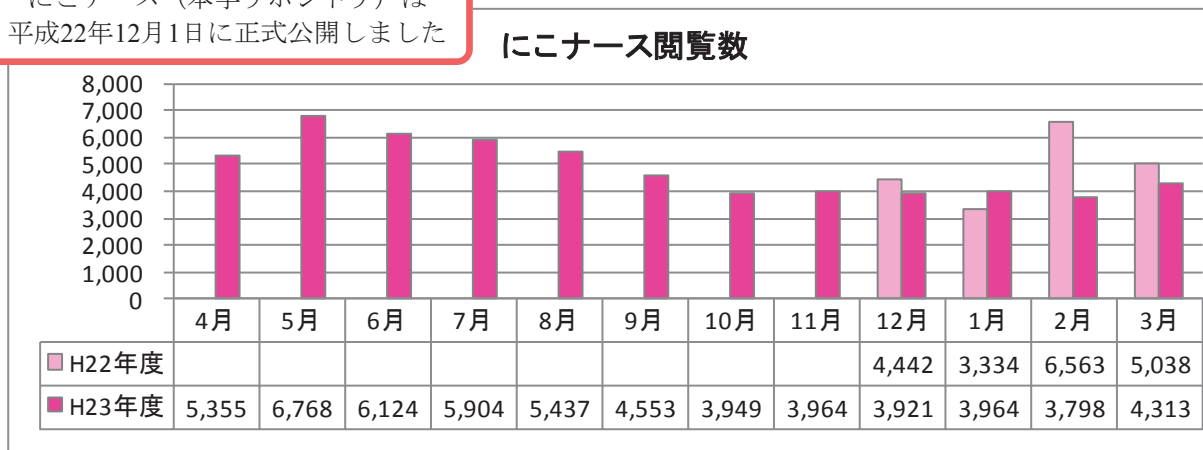
下記の雑誌は平成24年末で休刊します。

- ・ インターナショナルナースングレビュー

図書館・リポトリ利用統計 平成22・23年度比較



にこナース（本学リポトリ）は
平成22年12月1日に正式公開しました



医中誌Web(Ver5)バージョンアップ情報

NCNL図書館だより29号で、医中誌Web (Ver5) 第一段階バージョンアップ情報をご紹介しました。今回はその後のバージョンアップ情報一特に新機能についてご紹介します。

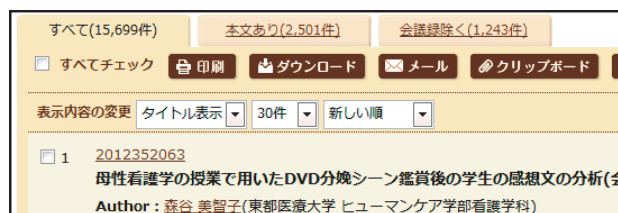
1. My医中誌



ユーザーごとに検索画面のデザインやカラー（茶・青・緑・ピンク）を設定したり（図はピンク）、フィルター機能や検索式の保存・メールアラートなどを設定できる。

まず学内LANに接続したパソコンでMy医中誌にログインし、メールアドレスを仮登録する。そのアドレスに正式登録の案内が届く。正式登録は学内LAN以外のパソコンでもできる。メールアドレスがIDとなる。My医中誌にログインすると右上のMy医中誌の横にIDが表示される（図の赤下線部分）。

2. フィルター機能



検索結果を絞り込み条件で出し分ける機能。設定は絞り込み条件の項目を選択する、もしくは検索条件式を入力する。「本文あり」「会議録除く」は初期設定されている。この場合の「本文あり」にはメディカルオンライン（係員の代行印刷）や有料論文が含まれている。

3. 検索式の保存およびメールアラート

あらかじめ保存した検索式で再検索ができる。さらに医中誌Webがデータ更新する（毎月1日と16日）たびにその検索式を自動的に実行し、検索結果をメールで通知してくれる。

<共用パソコンで、My医中誌を使用するときの注意点>

大学や図書館内の共用パソコンからMy医中誌にログインしたときは、医中誌Web終了と同時にMy医中誌も必ずログアウトしましょう。「My医中誌はログアウトしない」を選ぶと、次にそのパソコンを使用した人に自分のMy医中誌を使用されることになります。

寄贈図書案内 平成24年6月～11月受入

下記の著書をご寄贈いただきました。ありがとうございました。（敬称略・受入日順）

	寄贈者	書名	出版年	請求記号
学外	川合清	川合清日本画自選集 画業60年記念	1997	721.9-Ka93
	水澤英洋	プリオン病感染予防ガイドライン 2008年版 厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業プリオン病及び遅発性ウイルス感染症に関する調査研究班	2009	493.73-Ku73-08
	小笠裕二	新選小川未明秀作童話50 ヒトリボッチノ少年	2012	910.2-O67
	張能美希子	アボリジニ 差別論の展開と事例研究	2012	316.8-C53
	福西征子	語り継がれた偏見と差別 予防立法以前の古書に見るハンセン病	2012	498.6-F79
	黒江ゆり子	慢性の病いにおける他者への「言いづらさ」と看護のあり方についての研究 研究成果報告書 平成20年度～23年度科学研究費補助金「基盤研究(C)」	2012	N257-Ku72-08-11
	御興久美子	アカデミック・ハラスメントへの理解と防止 女性研究者が生き生きと働き活躍できる環境をつくるために[DVD]	2012	377-A29

NCNL図書館だより 第32号（2012年12月27日発行）

編集：新潟県立看護大学 図書委員会

〒943-0147 上越市新南町240番地

E-mail: tosy@niigata-cn.ac.jp

発行：新潟県立看護大学図書館

TEL: 025-526-1169

URL: http://lib.niigata-cn.ac.jp/